

令和6年、2024年が明けました 新しい年が皆さまにとりまして

すばらしい一年となるよう祈念いたします

行政調査新聞社一同

<海外情勢>

国を信じて、政府は信じるな

ーナイジェリアから学ぶ「カネ」と「政府」ー

今年7月に、渋沢栄一の一万円札など、新紙幣が登場する。

新札登場には、さまざまな憶測が流されていた。デノミ（通貨単位切り上げ）や、タンス預金を引き出すためといった話もあった。

だが7月に発行される新紙幣は、2年かけてゆっくりと上陸、これまでの紙幣も普通に使えるとわかり、奇妙な噂話は吹き飛んだ。しかしこの際、政府が発行する通貨（カネ）について認識を新たにすることがある。

特に「中央銀行デジタル通貨（CBDC）」について注意を払いたい。

デジタル通貨

「デジタル通貨」という言葉を聞いたことがあるだろう。

実際に使っている方も多いはずだ。デジタル通貨には以下の3種類がある。

① 電子マネー

Suika（スイカ）、nanaco（ナナコ）、PayPay（ペイペイ）など。
これらは現金をチャージして使うことができる。

② 仮想通貨（暗号資産）

民間企業が発行するデジタル通貨。ビットコインやイーサリアムなどが知られる。

③ 中央銀行デジタル通貨（CBDC）

国が発行する通貨をデジタル化したもの。

これら3つのうち、①は広く使われている。関東地方を中心に使われている Suika（スイカ）の発行枚数は約 9,000 万枚。共通して使われている PASMO（パスモ）4,150 万枚と合わせると1億 3,000 万を越える。西日本の ICOCA（イコカ）、名古屋の manaka（マナカ）など、交通系電子マネーはすべて合算すると2億枚も発行されている。この他、nanaco（ナナコ）やクレジットカード系の電子マネーもたくさん出まわっている。

②の仮想通貨（暗号資産）は、銀行を通さずにインターネット上でやりとり（取引）ができるものだ。仮想通貨は国が定める法定通貨ではないため、その価値が大きく変動する。裏付けとなる資産がないことから、不安定だ。価値が上下するから投資の対象にもなる。一方、仮想通貨は詐欺にも使われることがあり注意しなければならない。

電子マネーや暗号通貨より、遥かに巨大で使いやすいものとして、今③の「中央銀行デジタル通貨（CBDC）」の話題が世界中で盛り上がっている。

中央銀行デジタル通貨（CBDC）とは、日銀など政府当局が通貨として保証するもので、数年前から議論が続いている。世界で初めて CBDC が登場したのは 2020 年 7 月、北欧のリトアニアだった。これは記念コインのような形で実験的に使われたもので、以来、世界各国で実験がくり返されている。

政府発行の中央銀行デジタル通貨は「信頼できない？」

中国では 2019 年末から、実験的に、一部都市で CBDC「デジタル人民元」の実証実験を行いはじめた。2020 年には深圳（シンセン）市で 1,000 万人民元（約 1 億 5,000 万円）の

CBDC デジタル人民元を発行。この時点で中国は、世界でもっとも中央銀行デジタル通貨が活発化した国だった。中国政府は 2022 年の北京冬季オリンピックには中国全土で CBDC を発行すると公表。ところが実際には、その後、デジタル人民元は実験以上の規模にはなっていない。中国が**深圳市**でデジタル人民元を発行するより 1 カ月前に、カリブ海に浮かぶ島国のバハマで CBDC「**バハマダラー（バハマドル）**」が発行された。

バハマは「**世界最初のデジタル通貨使用国**」になるはずだったが、現実にはほとんど使われず、2023 年秋時点でも全体の 1 % 程度しか使われていない。

バハマが CBDC を導入した直後に、カンボジアも「**パコン**」という名の CBDC を導入した。カンボジアでは銀行口座を持っている人は 2 割程度だが、国民のほとんど全員が携帯電話を持っている。そこでカンボジア政府は、携帯電話の電話番号を登録するだけで CBDC 通貨を使えるようにした。ところがカンボジアの CBDC は、まったく普及していない。なぜ CBDC（中央銀行デジタル通貨）は普及しないのか。庶民大衆が「**目に見えず、手に取れないカネ**」を信用していないからだと考えられる。

デジタル通貨を求める世界中枢

IMF（国際通貨基金）や WEP（世界経済フォーラム・通称ダボス会議）など、国際的な機関は「**中央銀行デジタル通貨 CBDC**」を世界中に広げようと躍起になっている。

東南アジアでは 2021 年にインドネシア・ラオス・ベトナムが CBDC を導入しようと検討を開始。2022 年にはタイやミャンマーが導入を検討しはじめているが、まだ本格導入に踏み切った国はない。我が国も政府・日銀は導入にかなり本気になっているが、実用化には至っていない。

この秋には、**マイナンバーカード（個人番号カード）**が本格導入され、病院や薬局ではこのカードがないと診察を受けられないことになるというが、果たして成功するかどうか、まだわからない。政府が躍起になっているデジタル化は、簡単なものではない。

すべての通貨が**中央銀行デジタル通貨 CBDC**になると、おカネの流れは政府に完全に把握される。政治家の資金が誰から流されたかなど、ワイロが白日の下にさらされる。

麻薬や覚せい剤の購入もバレてしまう。女の子がホストクラブに貢いだカネも、どこかの誰がいくら支払ったかがわかってしまう。それはいいことだが、世の中にはすべて透

明になることをイヤがる方々もいる。パチンコ屋にいくら使ったか、居酒屋に何円支払ったかは内緒にしておきたい。さらに問題は、インターネットがダウンすると、カネが支払えなくなることだ。現実にも今でも時に、携帯電話が使えなくなる事態がたびたび発生している。そうした様々な事情から、CBDCは庶民大衆に求められていない。

強引に CBDC を導入して大失敗した国

世界各国政府は CBDC 導入に前向きだが、中国などの現実を見てもわかる通り、実現は難しそうだ。そうしたなか、国が強引に、通貨を CBDC に切り替えようとした国がある。ナイジェリアである。ナイジェリアと聞いてもピンとこない方も多いただろう。

アフリカの中央西部にある大西洋に面した国で、人口は2億1,500万人以上。アフリカ諸国の中でいちばん人口が多い国だ。ナイジェリア政府が通貨を CBDC に切り替えることを検討しはじめたとき、IMF（国際通貨基金）も WEF（世界経済フォーラム）も全面支援を約束した。だが、現金の取引をやめて通貨をすべて CBDC にすることには国民の95%が反対だった。それでも政府（与党の進歩変革会議。大統領はM・ブハリ）は現金の発行を極端に減らし「取引も給料も、すべてカードで」を強行したのだ。

一昨年（2022年）12月2日、ナイジェリアから現金が消えた。…本当に消えたわけではなく、給料の1割程度は現金で支給されたが、街中から現金はほぼ姿を消した。政府は、現金を使用せずに CBDC を使えと命令した。ナイジェリアは裕福な国ではない。

富裕層、中級層が全体の1割程度。国民の90%が銀行に口座を持っていない。ほとんどの家庭では、タンス預金などの現金はない。そんな国から現金が消えたらどうなるだろうか。町で食糧品を買おうとしても、手元に現金がない。給料・賃金などは CBDC で入る。普通に考えたら、国民は仕方なく CBDC を使うはずだ。ところがナイジェリアの国民は政府がすすめる CBDC の使用を拒否した。

ナイジェリア政府の公表数字では、1年過ぎた2023年12月の時点で、やや裕福な南部では22%が CBDC を使っている。やや貧しい北部では9%が CBDC に移行したという。これは政府発表の数字で、現実には CBDC の使用率は遥かに低い。国際情勢に詳しい中東の専門家たちは「国全体で数%程度しか使っていない」と分析する。極端な評論家の中には「国全体の1%にも達していない」という。

政府を信用しない

ナイジェリア政府発行の CBDC がどれくらい使われているのか、統計がないから推察しかできないが、どう考えても 5、6% 程度だろう。もともと **国民の 95% が CBDC 導入** に反対していたのだから、使った人は 5、6% 程度と考えるのが妥当だ。

だが、ちょっと考えていただきたい。

95% の国民——2 億 1,500 万人の 95% は 2 億 425 万人。その 2 億の人々は、現金がない中で、どうやって 1 年間を生き延びたのだろうか。ここに重大な意味がある。この先、日本でも大震災や大異変などで、現金がなくなることもある。そんなときに、どうしたら生き延びられるのか。ナイジェリアの人々がその答えを見せてくれた。

現金を失ったナイジェリアの人々は、まず、物々交換をはじめたのだ。衣類や食器と食糧品を交換する。食糧とガソリンを交換するといった具合だ。それだけではない。

借用証や手形で物品を購入するようになった。なぜ、そんなことが出来たのか。互いを「**信頼した**」からだ。この「**信頼関係**」は、今から 13 年前の日本でもみられた関係だ。

平成 23 年(2011 年)3 月 11 日。未曾有の大災害を前に、日本人はひとつになった。そこにあったのは、互いを信じるという単純で素直な気持ちだった。政府からカネを奪われたナイジェリアの人々は、互いを信じ、借用証ひとつで食糧を売った。互いを信じたからこそ、2 億のナイジェリア国民は無事に生きのびた。

近い将来、大災害が日本を襲うかもしれない。バカな政府が **CBDC 導入** を行うかもしれない。そんなとき信じられるのは政府ではない。信頼できるのは、顔を知っている仲間たちだ。日本にはまだ、互いを信じる心が残っている。そう信じたい。■